

## 矜持

矜持という言葉が好きだ。矜持とは「自分の能力を信じて抱く誇り。自負。プライド（『広辞苑』より）」という意味で、「矜」は矛の柄で武士が誇りのよりどころにしていたものからきており、自信や誇りを持って堂々と振る舞うという意味になったとあるが、「自尊心」や「誇り」「自負」といった同じ意味の言葉と違い、自信を保ちながら自身を抑制するというニュアンスがある。コロナ禍の今、「医師としての矜持を持って働く」という言われ方がよくされる。西洋には、「ノブレス・オブリージュ」という言い方があるが、「高貴なる者に課せられた責務」という意味合いで、矜持とはいささかニュアンスが違う。

いま、コロナの第3波の真っ只中ではあるが、遅ればせながら出された緊急事態宣言の効果により、新規感染者数は減少傾向にある。しかし、重症患者数や死亡者数は高止まりしており、これは、合併症を持った高齢者の感染者が増加していることに起因している。山口県でも高齢者施設のクラスターが相次いで発生し、そのたびに、余力のない高齢者の死亡が相次いでいる。高齢者施設では、マンパワーの不足により終息に時間がかかり、職員の疲弊は限界に達している。加えて、コロナ患者を受け入れている感染症指定病院も、患者が相次いで搬送され、しかも治療が終わっても患者の転院先が見つからず、これが更にコロナ病床をひっ迫させるという悪循環に陥っている。千葉県では新型コロナ回復患者を受け入れる後方支援病院体制を整えたという報道がなされ、羨ましく思ったものだ。山口県でも後方支援病院の体制整備が喫緊の課題だろう。受け入れ側にもいろい

広報委員

津永 長門

る事情があるだろうが、国難とも言えるこの状況に対応するには、オール山口県としての取り組みが必要だ。今こそ医療人としての矜持を示す時だろう。

新型コロナウイルスワクチン接種がよいよ医療従事者等から先行接種が始まる。mRNA ワクチンという従来と違うワクチンに対する不安やワクチンの副反応の問題もあり、調査では接種希望者は6割程度とあるが、ようやく新型コロナウイルス感染症に対する武器を持つことが出来るのである。集団免疫が得られるとされる接種率7割を目指し、国には、丁寧な情報提供をお願いしたい。また、円滑なワクチン接種体制の構築が求められているが、1994年の予防接種法の改正以降、集団接種の経験が乏しく、ワクチンの供給・配送、会場の確保など問題山積だが、一番の問題は、医師及び看護師の確保だ。このご時世、出務の強制は出来ない。しかし、全国民に対するワクチン集団接種という今までわれわれが経験したことのない史上最大のプロジェクトの成功には、エッセンシャルワーカーとしての医療人の矜持が必要だ。

感染症との戦いに、医療機関の病床分類や診療科などは関係ない。病原体は構わず襲ってくる。他施設で起こっていることが、自施設でいつ起こってもおかしくはない。他人事ではない。逃げてはいけぬ。明日は我が身と心得るべきだ。

第3波がおさまっても、必ず第4波、第5波が襲ってくる。まだまだ、コロナとの戦いは続く。以前の日常が取り戻せるよう、今一度言う、医療人としての矜持を示そう。